

〈論文〉

ライオネル・ロビンスの生涯と思想 — 『一経済学者の自伝』より—¹⁾

田中 秀夫

要旨 ロンドン・スクールの教授として20世紀に活躍したライオネル・ロビンスの『一経済学者』の自伝を紹介する。ロマン派詩人に憧れた青年が、時代経験のなかで、社会主義への傾斜時代から、戦争体験などを経て、自由主義経済学者として自己形成を遂げていくプロセスが興味深く語られている。特にケインズとの緊張感にみちた協力関係の叙述は胸に響くものがある。

キーワード ライオネル・ロビンス ロンドン・スクール キャロライン・ロビンス
ベヴァリッジ ハイエク 亡命知識人 ケインズ

はじめに

ライオネル・ロビンス (Lionel Robbins, 1898-1984年) は20世紀のイギリスを代表する経済学者の一人である。彼は、15年先輩のJ・M・ケインズ (John Maynard Keynes, 1883-1946年) のような華々しさはないけれども、経済学者としてアカデミズムで活躍するとともに、戦時内閣においてケインズの片腕として貢献し、また政府の各種委員などの公職においても、影響力の大きい幅広い活動を繰り広げたことで知られる。ロンドン・スクール (London School of Economics, ロンドン政治経済学校, 以下LSEと略記) の教授として彼は、とりわけ戦間期から戦後にかけて、ほぼ半世紀の間、獅子奮迅の活躍をしたと述べても過言ではない。大学の建物に彼の名がつけられているのも当然であろう。

ロビンスは1971年に『一経済学者の自伝』を公刊した。筆者はその監訳に携わったが、それは我が師、田中真晴先生 (1925-2000年) の愛読書であったことにもよる。先生は大学紛争の直後の時代にLSEに留学されたが、プレハーノフを中心とするロシア経済思想史の専門家としての留学であったから、ロビンスに関心があったわけではない。当時は研究者のソ連留学はほ

とんど不可能であったから、イギリスを選ばれたのであった。

先生がロビンズに関心をもたれたのは、案外遅く1980年代になってからであった。この時期、マルクス経済学から自由主義経済学へと力点を移しながら、先生はJ・S・ミルからマーシャルへの経済学の実展に関心を深めておられたが、自由主義を考え直すなかで、ハイエクやロビンズを読んでおられたのである。先生との共訳のハイエクのアンソロジー、『市場・知識・自由』²⁾はそうした時代の産物であった。

ハイエクがLSEに来たのはロビンズの招聘によってであり、二人はLSEを独自の学風をもった研究拠点とすることに努力した。それは新古典派の拠点としてのマーシャルやケインズのケンブリッジ大学にたいするライバルの形成を意味した。

筆者は、今は亡き編集者後藤郁夫氏からミネルヴァ書房で『一経済学者の自伝』を翻訳出版したいとの相談を受けて翻訳者をさがしたが、引き受け手を見つめることができなかった。それでやむをえず自ら監訳することになった。昭和18年生まれの後藤氏は京都大学経済学部において田中ゼミに所属したが、それは大学紛争の直前の時代のことである。後藤氏は高い見識をもった編集者として研究者に阿るところがなく、その先鋭な批評眼ゆえに研究者からも畏敬されていたが、その精神は今なお名古屋大学出版会に受け継がれている。

『一経済学者の自伝』は、ライオネルの個人的な歴史の興味深い回想に満ちている。彼の専門的な著作のどれよりも面白いと言えば語弊があるかもしれないが、本書は平明かつ緻密な文体で綴られた真摯な知性史として、またそれ以上に時代の証言として、味読するに堪える内容が盛り込まれている。ロビンズの伝記的研究を行なったオブライエン (D. P. O'Brien) が「素晴らしい」伝記だと述べている³⁾のはまっとうであろう。

1. 『一経済学者の自伝』の特徴

非国教徒、バプティスト（ケインズもまたバプティストであった）の農家に生まれ、やがてこの世の不条理に直面して、信仰心を失い、社会改革に憧れて社会主義に接近し、夢破れて自由主義者になったライオネルの変容は、取り立てて特異というより、この時代のイングランドの知識人にしばしば見られる軌道であったかもしれない。しかし、ロビンズの人生は、ケインズをはじめとして、ハイエク、バヴァリッジ、あるいはラスキやウォラスなどの多彩な人物と、経済学の研究教育の拠点としてのLSEの独自の伝統の形成を最大の節目とする、様々な重要な歴史的出来事が深く介入した活動的な人生であった。それは「極端な時代」（ホブズボーム）であった20世紀の、イギリスという世界の中心の一つの、これまたまさに政治経済と学問の中心において、期せずして中核となる地位を得た人物でなければ、あり得ない人生であった。

『一経済学者の自伝』は個人的な回想ではあるが、関係のあった多数の有名、無名の人物が登場する。彼の世界が波乱に満ちた、同時に知的に豊かな内容を備えたものであったことが、一部を除いて、相当率直に語られている。自らの歴史的経験を深く掘り下げて、それを時代の

文脈に関連づけて語ることなしには、たんなるエピソードの表面的な回想に終わるのであろうが、それをロビンズは意識的に避けて、まさに歴史を綴った。その手腕は見事なものである。

物心ついてからの家族の記憶と、故郷での非国教徒の家庭および社会の信仰生活から始まる物語は、ロビンズの自己形成にとって重要な要因となったが、それへの反発もまた語られており、そもそもロビンズは少年期にはロマン派詩人を愛読し、詩人になろうと思っていたらしい。

詩人は、第一次大戦から第二次大戦という困難な時代を、いかに生きるべきか模索するなかで、様々な偶然が作用して、結局、経済学者になっていく。しかも、政治・経済思想史に造詣が深いにもかかわらず、政策にコミットする経済学者となった。時代は彼に書齋派の経済思想史家（Armchair Economist）に安住することを許さなかったのである。彼の人生の転変は、時代の転変と重なり、その転変が重要な仕事をする知識人を生み出したと言えるであろう。彼の自伝は、したがって、同時に、20世紀のイギリスと大陸、あるいはアメリカにまたがる歴史の一齣の興味深い描写ともなり、当時の政府・内閣の国内、対外政策の回顧として、またLSEとオックスフォード大学、ケンブリッジ大学を中心とする大学社会の秘められた歴史を露にする回想ともなっている。実際に、本書が語る事実だけでも、十分に読むに堪える書物であろう。

『一経済学者の自伝』は1971年に出版されたから、その後の記述はない。しかし、いかに記憶力に優れたライオネルであっても、70歳を越えたこの時点に自伝を書いたのは、早すぎることはなかった。その10年後の1982年に彼は激しい卒中に倒れ、その2年後に病気が再発して帰らぬ人となったからである。

イギリス人（スコットランド人なども含めて）には『自伝』を残す人が案外多い。それにはイギリスが伝統を大切にす国であり、歴史の国、また『伝記』の国であることも関係しているであろう。またこの時代のたいていの知識人は、日誌ないし日記（Journal, Memoir, Diary, Commonplace Book などと呼ばれる）をつけ、また頻繁に手紙を書いた。これは一つの文化の形であろう。このような文化的伝統によって、自身の日常の内省と行動が反芻され、その結果、次第に統一的な思慮深い人格が形成されていくのではないだろうか。またそれには抽象的な思弁より経験主義を重んじる精神も関係しているであろう。

ホップズやヒュームの自伝はあまりにも簡潔に過ぎるが、J・S・ミルの自伝は古典的な作品である。歴史家ギボン（Edward Gibbon）も自伝を残しているが、ロックやハチスン、スミスは残していない。イギリスの植民地アメリカの人であったフランクリンもまた自伝で知られる。しかし、自伝はどうしても客観的に自分を語ることに限界がある。したがって、伝記的研究が必要になる。イギリスは伝記的研究のさかんな国である。繰り返しになるが、そういうなかであって、ロビンズ自身の個人史としても、彼が嵌め込まれた社会、あるいは世界の客観的な歴史の証言としても、本書は、彼自身の波乱に満ちた人生と、彼を取り巻く多彩な人物の興味深い描写としてだけでなく、同時に信憑性の高い濃密な内容の出色の作品になっている。

ライオネルとキャロライン

本書には妹のキャロラインが歴史家であることがさりげなく書かれている。それ以上の説明は一切ない。キャロライン・ロビンズと言えば、アメリカの高名な思想史家である。筆者が座右の書として長く親しんできたイギリス共和主義思想史研究の金字塔『18世紀のコモンウェルスマン』（ハーヴァード大学出版部、1959年）の著者キャロライン・ロビンズ（Caroline Robbins, 1903-1999年）がライオネルの妹であったことを、本書で初めて知った。それは私にとっては驚く発見であった。キャロラインの名著には「兄への献辞」があるが、兄が誰であるかの明示はない。したがって、この事実は、キャロライン・サイドの文献に親しんできたにもかかわらず、まったく気づかなかったことである。イギリスの経済学者とアメリカの政治思想史学者。同じロビンズという姓をもつからといって、誰がこの傑出した二人を結びつけるであろうか。しかし、改めて二人の写真を眺めると、恰幅の良い体型、ふくよかな容貌には共通のものがあのように感じられる。政治思想史はライオネルも好きな分野であった。しかし、その分野の著作は妹に委ねたのであろうか、ライオネルはあまり書いてはいない。

さすがに新 DNB（New Dictionary of National Biography）はその事実を記している。義理の兄弟姉妹を別として、ライオネルの兄弟姉妹のうち、生き残ったのはライオネルとキャロラインだけであった。ロビンズ家はバプティストであったが、キャロラインはそれに従わなかった。ライオネルもまた、母と妹の相継ぐ死の衝撃から信仰を失った。ロイヤル・ハロウェイから1926年にロンドン大学の博士課程に進んだキャロラインは、17世紀のイングランドの詩人で共和主義者であったアンドルー・マーヴェル（Andrew Marvel）を研究したが、この年に渡米してミシガン大学の歴史学のリッグズ研究員（Riggs fellow）となった。

当時、中産階級の独身女性がアメリカに渡ることは稀なことであった。なぜ妹はアメリカに渡ったのだろうか。イギリスよりアメリカのほうが女性にとって活躍できる場が大きかったからであろうか。キャロラインの『自伝』や『日記』は知られていない。研究者がやがて、その事情を明らかにする時がくるかもしれない⁴⁾。アメリカで彼女が長きに渡って、いかに熱心な教育者となり、共和主義研究の優れた業績を残したかについては必ずしもよくは知られていない。妹も兄に劣らぬ傑出した知識人であったことを記しておく。

2. 思想形成期

若き日のロビンズ

ロビンズは1897年生まれであるから、ハイエクの1年先輩である。わが国ではよく知られているケンブリッジのマルクス経済学者、モーリス・ドップ（Maurice Dobb, 1900-76年）は3年後輩である。二人は同じ時期にLSEで学ぶことになる。しかし、なぜかドップはいっさいロビンズの自伝には出てこない。

生家や幼年期は本書第1章「少年時代」に詳しい。親族のこと、家庭のこと、女性家庭教師

のこと、郷里のこと、シブソン村とホリークロフト村、非国教徒社会の雰囲気と文化などが、ロビンズという人物の自己形成に重要な影響を与えたことが、ここから伺える。

彼は、LSE で学ぶ以前に、ベンサムで知られるオックスフォード大学のユニヴァーシティ・カレッジで1915年から短期間学んでいるが、それが中断されたのは第一次大戦での従軍のためであった。彼は1915年の末に王立砲兵舎で訓練に入り、王立野戦砲兵センターに配属され、やがてベルギーからフランスへの戦線にも出て、負傷している。第2章「1914年から1918年」が取り上げているのは、この第一次大戦への従軍、戦争体験である。

イギリスを旅すると、各地に第一次大戦の記念碑があり、それには大戦の犠牲となった多くの人の名前が殉国者として刻印されていることに気づく。ロビンズが語るように、ドイツ軍のベルギー侵略は、イギリス人の義憤をかきたてたのであった。ロビンズ家の人々は、バプティストとして当時の自由党を支持しており、クエーカーのように兵役忌避者ではなかった。自由を守るという大義にかける思いは熱いものがあつた。ロビンズ自身、年齢をうやむやにして軍隊に入ったのである。イギリスの第一次大戦での犠牲は大きかった。ロマン主義的な詩に惹かれていたロビンズにとって、ロマン主義詩と自由のための戦争は、心のなかで繋がっていたように思われる。かつてロマン主義者バイロンは、ギリシア独立運動にコミットしていったし、スペイン内戦では、ケンブリッジの学生たちが、フランコの独裁と戦うべく、人民戦線に義勇兵となって加わっている。スペインで戦死したジョン・コンフォードの写真はケンブリッジのすべての進歩派の暖炉の棚に飾ってあつた、とホブズボームは述べている⁵⁾。

ロビンズはLSEに入る以前に、ギルド社会主義に強い関心をもった時期がある。戦線から戻ったロビンズは、政治家たちの権威が失墜したという思いに捉えられ、社会革命の思想に惹かれていった。それは改心であり、改宗であつた。しかし、ほどなく彼ら社会主義者たちが真剣に社会革命など考えておらず、経済問題についてさえ曖昧な認識しかもたないことに失望し、再び改宗せざるをえなくなる。第3章「混乱した目標」が語るのは、イギリス社会主義が直面していた諸問題と、それを解決できないでいる社会主義諸派への批判である。ロビンズはLSEで社会主義者たちと交流するが、自らは自由主義者、個人主義者として一貫した姿勢を保持した。

LSE の伝統

こうしてロビンズは縋る思いでLSEへと導かれた。第4章「ロンドン・スクール 1920年から1923年」で、ロビンズは、ウェップ夫妻やベヴァリッジ、バーナード・ショーが創設に貢献したLSEの自由を強調している。LSEのフェビアン主義と言われるけれども、フェビアン協会からは独立した学問研究の自由がそこにはあつた、というのがロビンズの認識である。LSEは社会主義的な傾向を帯びているという、しばしば主張された見解をロビンズは退けているのである。ロビンズは、スクールでの師として、とくにドールトン、ラスキ、キャナン、ウォラスの4人について特筆している。毀誉褒貶の甚だしいラスキに関してロビンズは、厳しい批判を

向けてもいるけれども、彼の美德についても強調しており、ロビンズは師たちから、それぞれに良い点を学ぶことがあった模様である。この多面的な人物批評は、ロビンズの分析を信頼できるものになっている。ハイエクをはじめとして、ラスキをまるで悪魔のように決めつけることが近年は流行りであるが⁶⁾、それには疑問がある。ここでロビンズは貴重な多くの友人たちと出会った。

ロビンズは、1923年に最優等クラスの学位を得て、25年からLSEの講師となった。モーリス・ドップは、1922年には共産党に入党していたが、この年にケンブリッジでの学業を終えて、23年から24年にはLSEでエドウィン・キャンナン (Edwin Cannan, 1861-1935年)⁷⁾の指導を受けて研究をおこない、24年にケンブリッジの講師になる。ロビンズが親しく接したキャンナンの回想はあっても、なぜかドップへの言及は見られない。ロビンズは、キャンナンについて「我々は彼を崇拜していた。我々は彼の言葉に縋り付いていた。我々は著作の一つ一つすべてを暗誦していた。彼は我々にとってその分野における典型的な、円熟した知性を象徴する人物であった」と書いているのだから、キャンナンのもとで研究に従事するドップとまったくのすれ違いだったはずはないであろう。1925年にドップは大学院での研究成果を『資本主義企業と社会進歩』として刊行した。そこで現代の経済理論が価格現象に分析対象を限定していることを批判し、階級的基礎と独占の分析が必要であると主張した。その翌年に、ロビンズは本書の書評を執筆して、ドップのマルクス主義的独占理論を論難しているのである⁸⁾。

ロビンズは、LSEの講師を1927年まで務め、この年にオックスフォードのニュー・カレッジの講師となる。1929年には、LSEに戻るが、今度は少壮31歳の経済学教授としてであった。以後1961年まで30年あまりその地位にあった。青年教授ロビンズはLSEを経済学の拠点にすべく奮闘した。

この時期の回顧は第5章「ロンドンとオックスフォード 1923年から1929年」に詳しい。結婚はジャーナリストとして活躍していたアルフレッド・ジョージ・ガーディナーとの親交もたらし、ロビンズは義父であるガーディナーのことを詳しく書いている。多くの点で二人は共通の関心をもっていたというが、ロビンズが彼からも大きな影響を受けたことは、明らかであろう。義兄となったアイルランド出身の社会事業家、ジミー・マロンも特筆されている。こうしたつながりは、一代貴族にまでなったロビンズが、労働者から切り離された高踏的な知識人とならなかったことと関係があると思われる。

1923年から1929年の6年間は、ライオネルにとって実に充実した時期であった。この時期に、ロビンズはベヴァリッジに短期間雇われ、結婚し、ガーディナーやジミー・マロンに出会い、そしてロックフェラー奨学金に採用されたが、それを辞退してオックスフォードのニュー・スクールの臨時チューターになることを選んだ。ロビンズは、ミーゼスを尊敬し、その恩恵を受けたことを強調している。LSEにオーストリア学派の経済学を受容する伏線が生まれたのである。またニュー・カレッジ時代にロビンズは歴史家のフィッシャーと哲学者のジョージフヤミス、そして数学者ハーディ、アメリカから来たアリン・ヤングについて、鋭い人物評を展開

している。ロビンズはいまだ20代であった。

3. 少壮教授ロビンズの1930年代

LSE の充実期

1930年代はLSEの充実の時期である。その中心にいたのはいまだ若いロビンズであったと述べても、さほど過言ではないように思われる。第6章「1930年代のロンドン・スクール」が描くのはその時期のことで、プラント、ハイエク、ヒックスのこと、カルドアからルイスまでの若手の任命、ロビンズ・セミナーのこと、著名な外国人経済学者をゲスト講師に招いての特別講義、ケンブリッジ大学との関係、ベヴァリッジのこと、ベヴァリッジの独断専行のフランクフルト学派との提携案、亡命知識人の受け入れといった具合にトピックが続く。

フランクフルト学派の受け入れを校長ベヴァリッジ (William Henry Beveridge, 1879-1963年) が独断専行で進めようとしたが、それにロビンズが反対した事件については、別稿⁹⁾で詳論したのでここでは簡単に触れるだけにする。

フランクフルト学派のマルクス主義は、スターリンの率いるソ連と国際共産主義運動からは距離を置いていた。しかし、LSEには様々な左翼勢力の影響力が浸透してきたのも事実であって、ロビンズに警戒感がなかったとは思われない。ロビンズの盟友となっていたハイエクがフランクフルト学派の受け入れに賛成するはずもなかった。また学派の受け入れと、マンハイムなどの知的亡命者の受け入れとは区別すべきものであった。もし、学派がまるごとLSEにやってきたとすれば、少なくともその後のLSEの歴史は変わったであろう。フランクフルト学派は結局、スイスからパリを経てアメリカへと亡命しなければならなかった。LSEが受け入れていれば、ピレネー山中で服毒自殺(暗殺説もある)することもなく、ベンヤミンの命は守られたであろう。

フランツ・ノイマンのコロンビア大学時代の弟子であった思想史家のスチュアート・ヒューズによれば、1930年代のイギリスの教育機関はアメリカより閉鎖的で、しかも受け入れたのは大部分が文学か古典学者で、社会学者は一握りにすぎなかった¹⁰⁾。しかし、そのなかでLSEは例外であった。ローラ・フェルミはこう書いている。「ファシズムが勢力を得ると、ヨーロッパ各国の経済学者や学生たちはロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに集中した。この学校は当時ウィリアム・ベヴァリッジ卿が学長をしていたが、彼はヨーロッパの迫害された知識人を救済するために組織的救援活動の先頭にたった。30年代半ばには、G・L・S・シャックルが書いているように・・・不運や迫害に追われた人々、そうではなくて普通に訪れた大きな流れに含まれるすぐれた人びとが、あらゆる方面からそこへ注ぎこみ、きわめて多彩な思想をもちこんだ¹¹⁾。」ベヴァリッジとともに、こうした知的亡命者への支援はロビンズも積極的に行なったが、しかし、そのこととフランクフルト学派の丸ごとの受け入れをロビンズは峻別したのである。

加えて、この時期のイギリスの知識人たちは、次々と「ソヴィエト連邦との恋」に落ち、熱狂的な称賛を行なっていった¹²⁾。ゴランツ、ストレーチーとラスキの有名な「レフト・ブック・クラブ」がそのような熱狂を物語っているし、あるいは熱狂を助長していたと言えるかもしれない。国家社会主義とスターリンのソ連はまったく正反対のものと映じていたのである。ウェッブ夫妻もバーナード・ショーも、ラスキもソ連に魅せられた。アメリカでもそうであったが、イギリスでもソヴィエト連邦の新しい文明を称賛する本や論文が続々と出たのがこの時代であった。スターリンの独裁の真実は隠されていた。LSEの共産党員はこの時期に20数名から90人近くまで増え、1937年から38年にかけてピークだった、と当時LSEの学生であったジョン・サヴィルは回想している¹³⁾。

ロマン主義からリアリズムへ

ロビンズは、そうしたソヴィエトへの熱狂を共有しなかった。ハイエクが批判的な立場から参加した社会主義経済計算論争に自身が直接参加することはなかったものの、計画経済の困難を十分に認識していたロビンズは覚めていた。外国や外部に夢を求め、そのユートピアに過剰にのめりこむという、しばしば知識人にありがちのロマン主義的メンタリティを、ロビンズはとうに払拭していた。その意味では、ロビンズはイギリス経験論の本流を継承するリアリストであった。リアリストは行き過ぎると懐疑主義の陥穽に陥る傾向があるが、それはロビンズには無縁であった。懐疑主義は、次々と取り組まねばならない課題に直面していたロビンズには贅沢な瞑想の随伴物であったであろう。現実主義者ロビンズは必要な場合は果敢に行動した。独裁者ベヴァリッジは1937年にLSEを去るが、ベヴァリッジに引導を渡す件では、自由主義者ロビンズはベヴァリッジより左翼に位置したラスキと協力した。ロビンズはもちろん孤独であったわけではなく、誰にもまして盟友とも言うべき個人主義的な自由主義者ハイエクがいた。結局、フランクフルト学派はLSEにアジールを獲得できなかった。

ケインズと対決した保守として描かれることの多いハイエクについて、ロビンズは詳しく論じ、自由への献身という点で強い連帯感を抱いていたことを、熱く語っている。ハイエクが仲介してやってきたカール・ポッパー (Karl Popper, 1902-1994年) については、あまり語っていないのも印象的である。オブライエンの指摘するように¹⁴⁾、ロビンズはフリードマンの実証経済学の定義も退けたが、ポッパーの反証主義も採用しなかった。この時期にベヴァリッジはスクールを去る。ベヴァリッジの孤立、判断ミスは彼の辞職を余儀なくしたが、にもかかわらずライオネルは最後までベヴァリッジの欠点とともに美質のよき理解者であった。

1930年にロビンズは、ケインズが議長を務める経済諮問会議の委員に選ばれる。ケインズに認められて、ロビンズは若くして公共政策に関与することになった。しかし、ロビンズはケインズの逆鱗に触れることになった。政府への勧告のうち、二点についてロビンズが同意しなかったのである。それは不況期における公共支出の増大策と輸入自由化政策であった。ロビンズは、前者については自分の間違いを認めたが、後者については間違っているとは認めなかった。

ロビンズが『経済学の本質と意義』を執筆するだけでなく『経済計画と国際秩序』(1935年)で経済ナショナリズムを分析し、『階級闘争の経済的基礎と政治経済学論集』(1939年)でマルクス経済学と真剣に向きあったのは、この時期である。労働運動にも関与したロビンズは、マルクス主義的な階級概念は空想的であると喝破し、現実には作用しているのは様々な利害集団、特権であると把握した。もちろん、ロビンズにとって望ましいのは、平等で公正な社会であった。ロビンズの経歴でもっともよく知られているのは第7章「出版と論争 1929年から1939年」で描かれているこの時期のことであろう。

『本質と意義』をめぐる論争

ロビンズは、経済理論の体系的著作——イギリス人がTreatiseと呼ぶもの——を残さなかった。それに代わって、辛うじてこの間に『経済学の本質と意義』と題した小著を刊行した(1932年)。経済学(Economic Science)を、希少性資源と個人の目的の関係としての人間行為の究明の学、言い換えれば、希少性を基礎とする財の生産と配分の効用の最適化を究明する科学として把握し、いわば経済学の最小定義を行ったことで有名となった。マックス・ウェーバーの科学的認識と価値判断の峻別という思想が明らかに彼に影響を与えていたのであるが、しかし、事実と価値の峻別はデイヴィッド・ヒューム以来のイギリス経験論の伝統思想であったし、ロビンズの回想には登場しないが、直近では、G・E・ムーアが注意を促していた。さらに、この時期のロビンズはミーゼス、ハイエク、マイヤーなどのオーストリア学派にすでに接近していた。ロビンズの科学と政策の峻別の主張は、ピグーの厚生経済学には科学的基礎がないという主張を意味するものとして受け止められた。それだけではなく、本書が誤解されるのは必定であったことを、ロビンズ自身も語っている。

ピグーは、スミスの師ハチスンに発する「最大多数の最大幸福」の思想をベンサムから受け継ぎ、公共哲学としての功利主義を厚生経済学に具体化しようとしていた。その前提は、社会的厚生、社会的効用は個人の効用の総和であるという基数的効用の概念であった。限界効用逓減の法則によれば、富者の限界効用は貧者のそれより小さいと考えられるから、富者から貧者への所得の移転は社会的厚生を増加させることになる。ベンサム流の功利主義がピグーの出発点であった。

抽象的な人間一般の実在性を認めれば、基数的効用の概念を援用したピグーの厚生経済学は成立するけれども、ロビンズのような厳密な個人主義から効用のマクロ集計量を演繹できるはずはなかった。それは論理の次元が異なるからである。早い話、人間一般は概念として成立しても、個人の効用曲線でさえ一義的に決まるものではない。ミクロ理論は仮説として有意義でも、厳密に考えれば、直ちに、マクロには適用できないであろう。マクロ経済政策は厳密科学ではありえない。ではマクロ経済政策の基礎は何もないのか。ロビンズの思想を踏まえて、ロビンズ・セミナーのメンバーであったヒックス、カルドアや、アメリカのサミュエルソンたちは序数的効用の概念を導入することによって、新厚生経済学を形成していく。それはパレート

最適から社会的厚生関数の確定へと展開されたが、今では、この新厚生経済学は、社会的公正を問題にするロールズの正義論や公共経済学の分野において新しい展開が見られるようになっている。それは政策の基礎にある慣習的価値判断（それは直感という総合的判断をとる場合もある）に学問的に確実な基礎を与えようとする試みとして、理解できるであろう。

経済は自生的秩序であるから、放任しておくのが最善である、という立場に立たないかぎり、経済政策は必要である。社会に発生する貧困や失業などの様々な問題を政府は放置しておくことなどできない。正義や社会的安定を実現し、不幸な人々を救済することは、必要である。特段、厳密な経済理論が適用できなくても、慣習に基礎を置く価値判断によって政策は可能である。したがって、ロビンズは、上の最小定義にもかかわらず、価値判断に左右される経済政策に積極的に関わっていく。その意味からすると、科学と政策の峻別は、それこそそれ自体が異なる価値であることを明確にすることによって、政策への関与をむしろ基礎付けるものであった。

4. 1940年代 戦時内閣官房経済部門部長

官僚たちとの共同

やがて1941年から45年まで、戦時内閣官房（War Cabinet Secretariat）経済部門の部長となる。第8章「戦時内閣官房経済部」が回想するのはこの時期のことである。この時期はドイツ、イタリア、日本などの同盟国はいうまでもなく、それに対抗する必要上、アメリカとイギリスを含む連合国においても、程度の差こそあれ、国家総動員体制が進行していた。戦時動員は、ロビンズを戦時内閣、経済官僚などと深く関わらせることになった。そうした政府への関与をハイエクは墮落と批判するかもしれないが、ハイエクは中央による計画化の論理、あえて言えば、国家総動員体制を批判する『隷従への道』（1944年）を書いて、やがてシカゴへと転じる。しかし、経済学者としてロビンズが、祖国と自由のために、戦時経済政策に関与しないことはありえないことであった。

ケンブリッジへの疎開、ヒトラーの登場、内閣官房、ヘミング、アンダーソン、ジュークスなどの経済官僚のことが特筆されている。ロビンズはここで官僚たちとともに、首相、大臣を頂点とする戦時内閣が直面していた経済問題について、調査と勧告をおこなった。とくに戦後の国際秩序や、生産の統制と配給制の問題が重要な課題であった。ロビンズたちは、戦時内閣に深くコミットすることによって、いわば官庁エコノミストの先駆となったわけである。

ケインズ、妹との再会

1934年にロビンズは『大不況』を刊行した。2年後の、1936年にケインズの『一般理論』が出版された。LSEの書店に列を成して人々が『一般理論』を買い求めた模様であるが、自らその一人であったと知的亡命者のA・O・ハーシュマンは書いた¹⁵⁾。ロビンズが『一般理論』を

どう受け止めたかは、『自伝』には必ずしも詳しくは語られていないが、次第にLSEにもケインズの影響が浸透してくるなかで、ロビンズも柔軟になっていく。1930年から、ロビンズはケインズと一緒に仕事をする機会が何度もあり、彼の天才的な仕事ぶりに付き合うとともに、彼の激しい感情に振り回されたケインズのチームの様子とケインズの奮闘振りは、戦後計画を振り返った第9章「戦後計画」に生き生きと描かれている。戦後の国際秩序の青写真を描いた会議におけるアメリカとの折衝の、苦難に満ちたドラマチックな展開は、ブレトン・ウッズ会議でのケインズの絶望的な努力が、彼の死の原因ではなかったかとの推測も含めて、おそらく本書の最大の魅力の一つであろう。

ロビンズは、ケインズをサポートして、1943年にはアメリカのホット・スプリング、1944年には有名になったアメリカのブレトン・ウッズ会議にイギリス代表として出席し、戦後の国際経済秩序の構築に関わり、また英米借款協定の交渉に貢献した。ホット・スプリングでの会議のあと、ライオネルは妹のキャロラインをペンシルヴァニアに訪問した模様である。ブレトン・ウッズでは、妹夫婦がライオネルに会いにフィラデルフィアから来た。6月25日の日記は、朝食をドイツ社会民主党の修正主義者として名高いエドゥアルト・ベルンシュタイン (Eduard Bernstein, 1850-1932年) と一緒にとり、昼食は妹夫婦と一緒にしたことなどが、記されている¹⁶⁾。翌年にかけて、兄妹はさらに何度か会っており、国際情勢を含めて様々な会話を行なった模様である。本書には、その交流については、あまりに個人的なことに属するというであろうか、一切述べられていない。

5. 第二次大戦後の活動

迫真の第9章を読んだ後、第10章「学究生活再開 1946年から1961年」に進むと、戦後のLSEの再建過程が詳しく述べられているにもかかわらず、いささか散文的な印象を拭えない。しかし、注意して読むと、新しい世代の経済学者の登場するなかで、戦後のロビンズの豊穡な研究成果について、その背景、文脈に即した回顧もあって、興味をかきたてられる。大学院の充実とシカゴのヴァイナー (Jacob Viner, 1892-1970年) との交流、講座の増設、デニス・ロバートソンのこと、自身の古典派研究の進展とトレンズの著作との出会い、そして雇用政策、貿易収支問題、ヨーロッパ連合問題、フランス、アメリカ、ソ連の動向、いかにして国際協調を実現していくかといった事柄に対するロビンズの深いコミットメントが語られている。ロビンズがJ・S・ミルを尊敬していたこともまた、本章で語られている。

さらに、ド・ゴール将軍は言うまでもなく、サルトルたちフランス知識人たちの反米主義に対してロビンズが苛立ちを示していることも印象深い。モンテーニュ、ラシーヌ、トクヴィルのフランス、その偉大な知的伝統を尊敬し、それに親しんできたロビンズにとって、フランスの反米主義は、世界の秩序を不安定にするものであった。戦中から戦後にかけて、アメリカと対抗して、ソ連を中心とする東側が次第に勢力を拡大していく。この時期にも、そうした社会

主義勢力に加勢するマルクス主義者やそのシンパサイザーが、知識人のなかでは、ますます増加していた。ロンドン大学は戦中であって中央ヨーロッパからのユダヤ人や亡命者を唯一受け入れた大学であり、自由で寛容を誇っていた。ケンブリッジにいたマルクス主義者、ホブズボームがLSEで休暇を楽しむことができたのは、そうした自由な雰囲気のおかげであった¹⁷⁾。

にもかかわらず、上のような文脈を考えると、ロビンズが、自由主義的な国際的協調と連携にコミットしたのは、全体主義への反対は言わずもがな、明らかに国際共産主義運動への警戒、反社会主義、反ソ連、すなわち左翼全体主義への反対という意味が込められていたように思われる。ベヴァリッジによるフランクフルト学派の受け入れの一件もあったし、ロビンズはLSEへのマルクス主義の影響に対して警戒心を抱いていなかったはずはないであろう。この点は明示的ではないから、推察である。しかし、ロビンズはイギリス政府が、スエズ運河紛争へと突入していった愚行にも触れて、断罪していることも印象に残る。

ロビンズの後半生

ロビンズは、1968年から74年にかけて、LSEの理事長を務めた。その間に、大英博物館の政治・経済学文献を収蔵するための新棟建設推進委員会の議長となり、ライオネル・ロビンズ館を実現した。大学紛争はLSEでも大きな出来事であった。それについては、最終章の末尾に語られている。過激派、暴徒、犯罪者という言葉で、革命を叫んだ若者が呼ばれているから、ロビンズは頑迷、保守的な秩序派であったと見えるであろう。それはわが国では東大紛争の収拾にあたった加藤一郎学長代行・学長を髣髴させるかもしれないが、事の真相はやがて、時が経過し、歴史研究が進み、LSEの紛争が、先進各国の大学紛争とともに、深く広く検証されて行くなかで、明確になっていくと思われる。本書でロビンズは、LSEの騒動の詳細は避け、その評価を後世に委ねた。

1961年から64年には、高等教育に関するロビンズ委員会の議長となり、報告書を取りまとめる。芸術科学省の提案、技術系専門学校の大学への統合は実現しなかったが、しかし、全般的な高等教育制度の拡充の方向は不可避であった。それについては、後に少し付言しよう。

1952年から74年まで、国立美術館の評議員、また1953年から59年、1962年から67年、テート美術館の評議員、1955年から80年にかけては、王立オペラ劇場の理事を務めたことから分かるように、彼は芸術行政に長く深いコミットを続け、この分野で芸術の保存と発展に大きな功績があった。それは詩人になりたいと思っていた、ロビンズの芸術少年、文学少年としての抱負、芸術への渴望の実現であったかもしれない。彼の友人の芸術家、エディー・ローズは不遇に終わったが、ロビンズは、芸術の支援者として、第二のエディー・ローズを生まないために奮闘したのかもしれない。彼の芸術行政への深い関与は、第11章「芸術行政」に詳しく描かれている。

「1958年に大きな転機が訪れ、人間味があり道理の分かった当時の大蔵大臣、ヒースコート・エイモリー氏が、突然、毎年の交付金を1万2500ポンドから10万ポンドに引き上げた」という

芸術行政の革命的な英断は、我が政治家にも見習って欲しいものである。大学への資金の投入についても同断で、学問や芸術は「貧すれば鈍する」世界である。

彼は、1961年から70年の10年間は『フィナンシャル・タイムズ』の会長の職にあり、また『エコノミスト』の出版責任者も一時期引き受けている。1954年から翌年にかけては王立経済学会の会長、1962年から67年にはイギリス学士院会長、1968年から78年にかけての10年ほどは、スコットランドのスターリング大学初代学長職にあった。アメリカ芸術科学アカデミー会員でもあった。このように様々な役職を経験したロビンズの人生は、思索的である以上に行動的に見えるかもしれない。このなかで彼が本書で詳しく述べているのは学士院での活動である。『フィナンシャル・タイムズ』に関しても最終章「ブラッケン・ハウスと公的諸問題」の冒頭で語られているが、それはLSEの教授でありながら、『フィナンシャル・タイムズ』の会長に就任するのはいかなるものか、という物議を醸したという話である。『エコノミスト』と王立経済学会については、詳論はない。

ラスキ、ベヴァリッジなど

本書は、さまざまな印象深い事実を語っている。共産主義者としてあまりにも有名なラスキがLSEでのライオネルの最初の師、望まざる師であったことは、意外な事実であるかもしれないが、本書で生々しく語られている。ライネルは時代の子として、さまざまな経験を重ねて、代表的な経済学者となって行った。その人生は、波乱に富んでいたし、きわめて興味深い多くの人々との出会いに彩られている。

戦争体験、社会主義的労働運動への関与、当時、影響力の大きかったフェビアン協会系の教授たちについての回想も、興味を引く。ベヴァリッジとの関係はきわめて重要であった。本書の各章でベヴァリッジは、いくつもの顔をもって登場する。ハイエクのようにベヴァリッジを、経済学をまるで知らなかったと決め付け、切って捨てるような評価はロビンズのものではない。ハイエクはケインズについても首尾一貫性がない、思いつきが目立つ、として断罪している。

それに対してロビンズの特徴は、緻密な人物批評である。ロビンズはある人の一面だけを捉えてその人物の価値を決めつけるという、人がしばしば陥りがちな陥穽には陥っていない。そのような複合的な視点は、数多くのエピソードの記憶と繋がっているように思われる。おそらくロビンズは日記をつけていたであろう。その一部は公開されている。それがいつか全面公開されれば、面白いにちがいない。ロビンズが出会った個々の経済学者や知識人についての、数々のエピソードと鋭い描写は、本書の魅力の一つである。ロビンズの研究の進展と著作の成立過程が、多くの人との交流、時代背景とともに描き出されている。ヒックス、カルドア、ハイエクなどを集めたLSEの発展過程の描写、ミーゼス、ロバートソン、ケインズ、ヴァイナーなどの経済学者との交流は知性史の一齣として刺激的である。一つの重要な拠点として、LSEが、先行するケンブリッジ学派との緊張関係を持ちながら、交流しつつ競い合った学問と思想の展開の醍醐味を味わうことができる。

亡命知識人、講師の招聘、ブレトン・ウッズ会議

1933年以降のドイツ・オーストリアからの亡命者たちとの交流は、きわめて興味深い知性史の一齣である。ジェヴォンズやウィックスティードの経済学にこそ親しんでいたが、ロビンズは、マーシャルを中心とするケンブリッジの経済学の伝統には必ずしも親しんでいなかった。左翼知識人は、あまり評価しない傾向があるかもしれないが、そうした段階で、大陸からの亡命者の受け容れに関係したことで、大陸の経済学、とりわけオーストリア学派の経済学を受容し、それはケンブリッジとは異なる独自の特徴をもったLSEの形成に繋がった。

ハイエクもそうだが、ミーゼス、カントローヴィッチなどへの共感に満ちた関心に示されているように、ロビンズは率直な暖かい人であって、オイケン的人格へ傾倒も感銘を与える。LSEはこうして国際的な経済学研究の拠点となったが、それはロビンズの努力の成果でもあった。ロビンズたちは、海外から多くの優れた経済学者を招聘し、マハループ、リンダール、オーリン、ナイト、ヴァイナーなどが来て、講義を行なった。オーストリア学派、北欧学派、シカゴ学派など、それぞれに特徴をもったいくつかの拠点の経済学が、LSEをいわばターミナル駅としてこのように交流を深めたのであるが、それは自然の流れ、意図せざる結果ではなく、明らかにロビンズたちの努力に負うのである。

ベヴァリッジとの濃密な関係も、マクドナルド首相の諮問機関でのケインズとの交友と確執のエピソードなども興味深い。国際通貨基金や世界銀行の創設などを生み出したブレトン・ウッズ会議の描写は、『自伝』の白眉であろう。

著者が本書は自伝であり、散漫な回想ではないと述べていることに注意しなければならないが、しかし、ロビンズは自らの長命な人生を本書ですべて語りつくしたわけではなかった。そもそも1971年に出版された本書に以後の記述がないのは当然である。しかし、それ以前の歴史に関しても、およそすべてが語られたわけではない。例えば、戦後の学究生活の回顧は基本的に1961年で終わっているため、その後の記述がないのは惜しまれる。この時期のLSEについての分析もなければ、マンチェスター大学や、オックスフォード大学で行った講義から生まれた、後期の著書『経済思想史における経済発展の理論』（1968年）や『政治経済学、過去と現在』（1976年）などについての回想は、本書にはない。長く同僚であった経済史家のR・H・トローニーも一箇所名前が挙がっているだけで、何も語られていない。

ロビンズ報告

ロビンズが高等教育政策の推進において果たした役割も重要であった。本書は、その一端は語られているとも言えるが、1961年以来、彼が研究を犠牲にして、不承不承引き受けた高等教育委員会の委員長職にまつわる一齣は本書では扱われていない。委員会は2年半の集中的なイギリスと海外の大学の実情の調査をおこなったが、ロビンズ委員会は1963年に有名な『ロビンズ報告』を刊行した。

高等教育の目的は何か。報告書は次の四点を明示した。1、専門的能力の訓練、2、教養ある男女の育成、3、学問の発展と真理の探究、4、共通の文化と市民としての共通の基盤の継承¹⁸⁾。この4項目はいずれも重要な目的であるだろう。

イギリスの高等教育の拡充を求める統計調査を指揮したのは第12章で述べられているように、クラウド・モーザーであった。この報告は、以後のイギリスの高等教育制度の拡充に大きな影響をもたらした。旧来型の少数の大学と専門学校という伝統的構造の解体、カレッジの大学への昇格、新設大学の設置による大学の再編が続いた。教員養成カレッジの大学への統合は拒否された。工学系の専門学校は大学へ格上げされたが、ロビンズたちの提案のように当分の間、従来の大学に統合はされなかった。二元構造ができたのであったが、しかし、サッチャー政権による締め付けの後、メイジャー政権時代に大学は、変革の度を増し、ポリテクニクも教員養成大学も、学位を授与しうる昇格を果たした。こうして大雑把に言えば、ようやくロビンズ報告が描いた高等教育の望ましい方向が実現された。

経済学部なども多くの大学に設けられることになった。古典教育の牙城であった大学が直ちに变质したとは言えないけれども、大学は、こうしてプラクティカルな学問や技術を教育研究する場へと大転換を遂げていく。大学生人口がきわめて低かったイギリスは、やがてアメリカにも匹敵する高学歴社会となる。

そのような変革には弊害もあったと思われるが、科学・技術が産業を革新し牽引する現代文明にあって、最先端を突っ走るアメリカが先導する社会の知的高度化、知識社会化に遅れずについて行くことが不可避的な時代の要請であった。したがって、イギリスも他国も、ながく続いてきた伝統的な大学に安住できない時代を迎えていた。アメリカの州立大学をモデルとしたわが国の戦後の新設大学体制は、工学部重視とあいまって、知識の高度化時代に対応する先駆性をもっていたと言いうるかもしれないが、それはやがて、教養主義の没落を招来するであろう。

この時点のイギリスは明らかに遅れていたのであった。古典的な人文学を衰退させることなく、いかにして大学に大変革を導入するか。この役目は、まさに活動的なロビンズのような知識人にうってつけのものであったであろう。ロビンズ報告の勧告はすべてを実現することはなかった。しかし、変革は進んだ。ロビンズ自身、ヨーク大学の創設に直接に関係し、また新設のスターリング大学では学長を務めた。ロビンズのリーダーシップのもとで、イギリスが遅れた大学の教育学術体制をアメリカや大陸に接近させる一方、学部教育の過度の専門化を排して、専門教育は大学院に移し、学部教育は幅広い分野を教える方向へと転換を図ったことは注意すべきであろう。

ちなみに、LSEに、1997年にケンブリッジからアンソニー・ギデンズが移ってきて、校長(Director)となった。ブレア政権の第三の道のプレーンともなったが、ギデンズは左右両派の調停をしながら現代の諸問題に発言を続けている。新左翼よりと思われるが、ギデンズの姿勢はロビンズを継承するもののようにも見える。

イギリス学士院

ロビンズがイギリス学士院会員、会長として活躍したことも、本書第12章に語られている。学士院の活動範囲は広く、顕彰、講演会、広範な刊行物、国際協力、国内の人文科学研究・国外イギリス機関への政府助成金の配分などに亘っている。このようにイギリス学士院は、たんなる名士会にとどまらず、人文科学関係の重要な出版物を刊行し、学問研究を積極的に支援している。イギリス学士院の会報 (*Proceedings of the British Academy*) はオックスフォード大学出版会から市販されており、その充実した内容は、人文科学の成果を社会に広く普及するという精神を体現している。英国学士院が人文科学分野しかもたないことはその特徴となっている。要するにイギリスは工学部至上主義のわが国とは違って、人文社会科学に応分の資源を投入することによって、学問分野間のバランスを維持してきたのである。

経済思想史講義と理事長職

LSEでのロビンズの経済思想史の講義は1982年まで毎年開講され、聴衆に感銘を与えた。彼が経済思想史と政治思想史が好きだと語っているところがあったが、しかし政治思想史は妹に委ねたのであろうか、自ら本格的な研究は行なわなかった。彼は1968年から74年まで、LSEの理事会の長を務め、大学紛争に直面した。ロビンズのこの時期の活動は詳らかではないが、この時期に彼はLSEの校長の役割を奪ったと非難されたことがあったらしい。しかし、彼のこうした理事長としての奮闘のおかげでLSEは分裂を免れ、名声を維持した、とスーザン・ホーソンは『新DNB』に記している。ブリティッシュ・ライブラリの図書の一部を、今ではライオネル・ロビンズ館と呼ばれている建物のなかに移した一件でもロビンズは指導力を発揮した。

『自伝』には上に述べたことのほかに、1958年以来、関係があった『フィナンシャル・タイムズ』の一齣や、イギリス学士院 (British Academy) での活動は語られているが、『エコノミスト』との関係はきわめて簡単な記述しかないし、すでに指摘したように、「王立経済学会」など取り上げられていないことがらも多々あると思われる。1971年刊行という本書の限界もまた存在する。その点の欠落は念のために指摘しておきたい。さらに20世紀の英米での経済学の形成史の広大な範囲を考えると、『自伝』が光を当てた領域は、そのごく一部分でしかないかもしれない。オブライエンの研究 (後述) などが、その欠落を補ってくれるであろう。

しかし、それでもロビンズという稀有な知性、活動的人物の自伝として、またこの時代の証言として、本書にはそれ自体として、たんに面白いだけでなく、重要な価値があると思われる。本書は代表的なイギリスの知識人の証言として、味読するに値する内容を持っている。20世紀の証言として、およそ接点のなかったマルクス主義者、ホブズボームの回想と引き比べてみるのも面白いかもしれない。二人は好対照をなす。

批判者たち

前述したように、1930年代にケンブリッジにいたホブズボーム (Eric Hobsbawm, 1917–2012年) は休暇をLSEで過ごすことが多かったらしい。当時まったく無名のノルベルト・エリアス (名著『文明化の過程』をスイスで出版準備中) が大学構内を歩く姿を見たという。「1930年代のイギリス学界は、古典学や物理学のような世間に認められている分野で活動している者でなければ、中央ヨーロッパ出身のユダヤ人と亡命者の才能に対しては、およそ盲目だった。彼らに居場所を与えたのは、おそらくLSEだけだった。」けれどもホブズボームはLSEの学問的水準に疑問を呈して、こう述べている。LSEの経済学は「当時は、というよりもつねに、ケンブリッジほどは傑出していなかったし、やる気もなかった。非常に頭の良い才能を持った若者を何人か引き付けたが、残念ながら彼らはホートン通りでは永続的なポストを得られなかった¹⁹⁾。」この辛口の批評は左翼知識人の傾向なのだろうか。

LSEに学んだサヴィル (John Saville, 1916–) はきわめてロビンズに批判的である。ロビンズの講義は巧みではあったが、内容は現代社会に関係がなかった。戦後の認識もさほど変化なく、間違った、単純な思想からなっており、知れば知るほどロビンズが嫌いになった。ロビンズは権威主義者であった。ロビンズ委員会の評価は高いが、彼はかならずしも自由主義的な寛容と共感をもった議長ではなかった。盟友ハイエクも「彼には実際に独創的な思想はほとんどなかった」と述べていた。このロビンズ評はダーレンドルフがLSEの100年史で、引用して有名となった。サヴィルは、ロビンズよりハイエクが理論家として洗練されているとされていた、と述べている²⁰⁾。

ロビンズを偉大な人物として賛美するだけに終わるのではなく、このような批判的な評価もあることを知っておいてよいだろう。私の個人的な経験では、名著『経済学の本質と意義』は言うまでもないが、効用の個人間比較をめぐるロビンズ論争を扱った清水幾太郎氏の『思想』連載論文 (後に『倫理学ノート』となった) や、間接的に耳にしたロビンズ報告、翻訳された『古典経済学の経済政策理論』や『経済発展の学説』などが印象に残っている。

注

- 1) 本論文は、元は筆者が監訳したロビンズ卿の『一経済学者の自伝』(Lord Robbins, *Autobiography of an Economist*, Macmillan: St Martin's Press, 1971) の邦訳 (ミネルヴァ書房, 2009年) の解説として用意したものであるが、そのままの形では発表されなかった。「監訳者あとがき」にその一部分を利用し、また既発表の「ロンドン・スクールとフランクフルト学派」(京都大学経済学会『経済論叢』第183巻第3号, 2009年(平成21年)7月) にも一部分を用いた。そういうわけで、すでに一部は発表済みの論考であるが、『自伝』から浮かび上がるロビンズの生涯と思想の解説として、改めて発表することにした。今回、元の原稿に手を加えたが、後の注で触れるホーソンの『ロビンズ伝』は一部参照したにとどまる。
- 2) 田中真晴, 田中秀夫共編訳, ミネルヴァ書房, 1986年。これは後述の後藤郁夫氏との関係で具体化した。
- 3) *Economic Journal*, 98, March 1988, p. 104. なお2011年にスーザン・ホーソンの大部な『ライオネル・ロビンズ』という浩瀚な伝記が出ており、今では本書によって多くのことが明るみにもたらされたが、だからと言ってロビンズ『自伝』が無価値になったわけではない。そのなかでロビンズ『自伝』はフルに利用されている。

- Susan Howson, *Lionel Robbins*, Cambridge U.P., 2011.
- 4) ホーソンによれば、キャロラインは1924年からロイヤル・ハロウェイ・コレッジの歴史学におけるクリスティー・フェローシップを得ており、1926年には博士学位を得た。そして1年間ミシガン大学の歴史学のリッダズ・フェローを務め、さらに1年クリヴランドのケイス・ウェスタン大学の女子カレッジで教えた後、1928年には6ヶ月間イングランドに帰国する。イギリスの学界では「ライオネルが私より賢かったので、二人のロビンズには余地がない」と考えたキャロラインは、アメリカに戻り1929年からプリン・マーで授業を始め、昇進をとげる。その間に、1932年にはアメリカ人の英語教師ジョー・ハーベン (Joe Herben) と結婚した。ジョーは兄ライオネルと同年齢で趣味が近く、フランス南部、バツハ、ブラームス、現代フランス語が好きだと兄に告げている。Susan Howson, *Lionel Robbins*, Cambridge U.P., 2011, p.143, 234. キャロラインがハーベン姓を名乗らなかったのはなぜだろうか。
 - 5) ホブズボーム『わが20世紀・面白い時代』, 河合秀和訳, 三省堂, 2004年, 114ページ。
 - 6) 水谷三公『ラスキとその仲間—「赤い30年代」の知識人』中公叢書, 1994年。
 - 7) 我が国では『国富論』のキャンナン版——文献注をもつ学術版——で知られているであろう。
 - 8) Stuart Macintyre, *A Proletarian Science: Marxism in Britain 1917-1933*, Cambridge U.P., 1980, p. 170. Howson, *op.cit.*, pp. 136-7.
 - 9) 「ロンドン・スクールとフランクフルト学派」, 京都大学経済学会『経済論叢』第183巻第3号, 2009年(平成21年)7月所収。
 - 10) スチュアート・ヒューズ, 荒川幾男・生松敬三訳『大変貌: 社会思想の大移動 1930-1965』みすず書房, 1978年, 29ページ。
 - 11) ローラ・フェルミ, 掛川トミ子・野水瑞穂訳『亡命の現代史』2, みすず書房, 1972年, 140ページ。
 - 12) スターリニズムに疑問を呈したアンドレ・ジードの『ソヴィエト旅行記』は1936年刊行であったが、フランスで論争が巻き起こった。スターリニズムの実態は必ずしもよく分からなかったからである。ソヴィエトに恋したのは日本の共産主義者も例外ではなく、理想に燃えた多くの若者がモスクワに渡り、スパイの汚名を着せられて虐殺された。加藤哲郎『国境を越えるユートピア』平凡社ライブラリー, 2002年。
 - 13) John Saville, *Memoirs from the Left*, The Merlin Press, 2003, p. 8.
 - 14) *The Economic Journal*, 98, March 1988, p. 108.
 - 15) アルバート・O・ハーシュマン, 田中秀夫訳『方法としての自己破壊』法政大学出版局, 2004年, 122ページ。
 - 16) *The War Time Diaries of Lionel Robbins and James Meade 1943-45*, 1990, p. 159.
 - 17) ホブズボーム, 前掲書, 124ページ。
 - 18) ヴィヴィアン・グリーン『イギリスの大学』, 安原義仁・成定薫訳, 法政大学出版局, 1994年, 396ページ。
 - 19) ホブズボーム, 前掲書, 124ページ。
 - 20) John Saville, *op.cit.*, pp. 6-7.